銀のペンセル

小川未明

青空文庫

三味線をひいて、旅の女が、毎日、温泉場の町を歩いていました。諸国の唄をうたってみんなをおもしろがらせていたが、いつしか、その姿が見えなくなりました。そのはずです。もう、山は、朝晩寒くなって、都が恋しくなったからです。

勇ちゃんも、もう、東京のお家へ帰る日が近づいたのでした。ここへきて、かれこれ三十日もいる間に、近傍の村の子供たちと友だちになって、いっしょに、草花の咲いた、大きな石のころがっている野原をかけまわって、きりぎりすをさがせば、また、水のきれいな谷川にいって、岩魚を釣ったりしたのであります。

「君、もう、じきに東京へ帰るのか。」と、一人の少年が勇ちゃんにききました。

その子は顔がまるくて、色の黒い快活の少年でした。勇ちゃんは、この少年が好きで、いつまでも友だちでいたかったのです。

「君のお家が東京だと、いいんだがな。」と、勇ちゃんは、いいました。

「君のお家こそ、こっちへ引っ越してくれば、いいのだ。」と、少年は答えました。

空の色が、青々として、白い雲が高く野原の上を飛んでゆきます。

あとの子供らは、いつか、どこかへいってしまったのに、その少年ばかりは、名残惜しそうに勇ちゃんのそばから、いつまでもはなれずにいました。

「いいとこへ、つれていってやろうか。」と、少年は先に立って、草を分けて、山の方へ歩

きました。

「どこへゆくんだい？」

勇ちゃんは、顔をあげて、いくたびもあちらを見ました。少年は、だまって歩いていましたが、やがて目の前に、林が望まれました。葉風が、きらきらとして、木の枝は、風にゆらめいていました。もう口を開けているくりの実がいくつも、枝のさきについているのでした。

「僕、見つけておいた、いいものを取ってきてあげるから、ここに待っていたまえ。」と、少年は雑木林を分けてはいりました。そして、あちらの、こんもりとした、やぶのところへいって、しきりと、つるをたぐり寄せていました。勇ちゃんは、後ろについてはいる勇気がなく、林の端に、立って待っていると、少年は紫色のあけびの実をいくつも、もいできてくれたのであります。

「この森には、りすがいるから、みんな食べてしまうんだ……。」と、少年は、いいました。

勇ちゃんは、はじめて、りすは、こんなところにすんでいるのかと知りました。

「東京へ持って帰って、お土産にしよう。」

勇ちゃんは、兄さんや、姉さんや、また、近所の叔母さんに、これを見せたら、どんなに喜ばれるだろうと思いました。

「東京へ持って帰るなら、まだ、いいものがあるぜ……。高山植物が、いいだろう……。」

「高山植物があるの？」

勇ちゃんは、少年について、こんどは山の方へ上ってゆきました。山と山の間になっている谷合いにさしかかると、日がかげって、どこからか、霧が降りてきました。岩角に白い花が咲いているのを、少年は、見つけて、

「これは、うめばちそうだ。」といって、丁寧に根から掘ってくれました。

また、湿っぽい、日のわずかにもれる、木の下をはって、小さいさんごのような赤い実のなっているのを指しながら、

「これは、こけももだ。こうして持っていったら、根がつくかもしれない。」と、少年はしんせつに、掘ってくれました。

温泉場の町まで、二人は、いっしょにきました。別れる時分に、

「君、また明日のいまごろ、あの大きなしらかばの木の下であわない?」と、勇ちゃんはいいました。

無邪気な、黒い目をした少年はうなずいて去りました。

「なにか、僕の持っているものをやりたいな。」と、勇ちゃんは少年と別れてから、考えていました。

「明日あったとき、僕の大事にしている銀のペンセルをやろう……。」と、心の中で、きめました。いつしか、約束した翌日とは、なったのであります。

しらかばの下へ、勇ちゃんはくると、すでに少年は待っていました。おたがいに、にこに

ことして、また、珍しい草をさがしたり、石を谷に向かって投げたりしましたが、勇ちゃんは、忘れないうちに、持ってきた、銀のペンセルを出して、

「これを君にあげよう……。」といって、少年に渡そうとしたのです。

少年は、手を出したが、じっと見て、それをもらおうとはしませんでした。

「僕、こんないいものいらない。」と、顔を赤くしながら辞退しました。

「いいから、君にあげよう。」と、勇ちゃんは、無理にも取らせようとしました。

「僕、鉛筆があるから、いらない。」と、少年はなんといっても取らなかったが、ついに、駆け出していってしまったのです。

勇ちゃんは、あとで、さびしい気がしました。それから、温泉場を立つ日まで、ふたたび少年を見ることができなかったのでした。東京へ帰る汽車の中でも、勇ちゃんは、少年のことを思い出していました。

「なんで僕のやろうといった、ペンセルを取ってくれなかったのだろうな……。」

こう思ったが、一方に、ペンセルなんか欲しがらない、少年が、なんとなくなつかしく感じられたのです。

高山植物は、都会へ持ってくるとしおれてしまいました。

「どうかして根のつくように。」と、勇ちゃんは高い物干し台の上に、こけももとうめばちそうの鉢を持ってきておいたのです。青い青い夜の空は、遠く、北の方に垂れかかっていました。

そのかなたには、これらの植物のふるさとがありました。星の光が高原の空にかがやいたように、夜ふけの空にきらめき、さすがに、都会にも、秋がきたのを思わせて、風がひやひやとしました。

「ここに置いたら、山にいるような気がして、根がつくかもしれぬ。」と、勇ちゃんは、少年の取ってくれた草花を大事にかばいました。そしてあくる日、夜の明けるのを待って、物干し台に上がってみますと、なんとしても、だますことはできなく、うめばちそうの白い花は頭を垂れ、こけももの細かい美しい葉は幾分か黄ばんでいるのです。

あの清浄な、高い山でなければ、これらの草花は育たないことを知りました。勇ちゃんは、それから毎晩のように物干し台に上がって、青い夜の空をながめながら、高い山や、少年のことを思い出していました。白々として、銀のペンセルのように、天の川が、しんとした、夜の空を流れて、その端を地平線に没していました。

「僕は、こんないいものはいらない。」といった、少年の言葉が耳にひびいて、こけももの赤い実のように、うめばちそうの白い花のように、勇ちゃんには、未知の山国の生活がなつかしまれたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　7」講談社
　1977（昭和52）年5月10日第1刷発行
　1982（昭和57）年9月10日第6刷発行
底本の親本：「未明童話集5」丸善
　1931（昭和6）年7月10日発行
初出：「児童時代　創刊号」
　1930（昭和5）年12月
※表題は底本では、「銀《ぎん》のペンセル」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：きゅうり
2020年5月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銀のペンセル

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/